根城小

主体的に学び合う子の育成

～各教科における対話的学びの充実を目指して～

（３年計画の４年次）

校長　　中村　　雅臣

１　研究主題について

本校では、教育目標「本気でがんばる子」を掲げ、努力目標として「進んで学ぶ子」の育成に取り組んできている。昨年度までは、３年計画３年次として「主体的に学び合う子の育成～各教科における対話的学びの実現を目指して～」という研究主題のもと、児童が主体的に学び合うための、より効果的な対話的活動と認め合いについて、全教科での授業実践により研究し、一定の成果を収めることができた。

一方で、以下の課題も挙げられた。

・課題設定の場面において自力で取り組む際、児童が自分の考えをもつために、どのような助言や補足が効果的であるか、また、対話的場面では、より効果的な学習の内容や方法を吟味し、次の学びに向かえるような授業展開を考え、学び合いのよさを実感させていく必要がある。

・コロナ禍にあった３年間は、子ども同士が考えを伝え合う対話的な授業が思うように実践できなかった。また、認め合う場面では、日常の生活の中でこそ肯定的に友達の言動を捉えたり、友達の良いところをみつけ自分で取り入れたりする場面が多く、授業の中では提案しにくいという問題点があった。

そこで、今年度は、昨年度までの研究を概ね継続し、３分の４年次として、「児童が主体的に学び合うための、より効果的な対話的活動」について、全教科での授業実践により研究の充実を目指すことにした。具体的な考えをもたせる働きかけや、目的を明確にした対話的活動の内容や方法の吟味を授業で実践し、より充実した対話的学びについて協議していく。また、児童の居場所作りの実践を全体会で情報交換をすることで、認め合いが根底にある授業づくりを目指していきたい。このような研究実践を積み重ねることで、主体的に学び合う子が育つと考える。

２　研究のねらい

児童が主体的に学び合うためには、対話的な学びの展開を工夫していくことが効果的であることを授業実践を通して明らかにする。（課題と向き合う、伝え合う・話し合う）

３　研究仮説

対話的な学び（課題と向き合う、伝え合う・話し合う）の工夫をすることにより、児童が主体的に学び合うことができる。

４　研究内容

対話的な学びの工夫

ア　考えたくなる課題設定や意欲的に課題に向かうための手立ての工夫（課題と向き合う）

イ　目的を明確にした伝え合う場の効果的な設定（伝え合う・話し合う）

５　研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等	
7	12	第１回授業研究（１学年） 国語科「おむすび　ころりん」 授業者：教諭　吉田　悦子 助言者：教頭　蛭田　健	登場人物がしたことを動作化させて場面の様子を想像させたり、話したことや繰り返しの言葉を見つけさせたりしたことで、主体的に音読の工夫を考えることにつながった。

10	25	教育指導課・センター訪問	それぞれが仮説に基づく授業実践を行った。また、指導を受けたことを基に、それぞれの実践について振り返り共有した。
		第２回授業研究【要請訪問】（４学年） 道徳科「どっちがいいか」 授業者：教諭　浜田　真希 助言者:八戸市教育委員会教育指導課 主任指導主事　青木　拓哉氏	ルールはない方がよいか、たくさんあった方がよいか、理由をもって立場を表明させることで自分事として考えさせた。また、村人たちの表情に吹き出しをつけ、気持ちを考えさせることによって、ルールに対する認識を深めながら話し合うことにつながった。
12	6	第３回授業研究（６学年） 算数科「図形の拡大と縮小」 授業者：教諭　北澤　瑛利子 助言者：校長　中村　雅臣	縮尺を隠した問題提示から、縮尺の必要性に気付かせ取り組ませた。また、地図上の1cmが実際は10000cm（100m）であることなど、児童が分からないことを全体⇒ペア⇒全体⇒ペアと、児童の発言を何度も問い返しつないだことで、相互理解を深めることにつながった。

(2)一般研修等

月	日	内容・講師・概要　等
5	31	児童理解　～配慮を要する児童、支援の仕方～
6	14	図画工作　描画指導 「よさ」に気づき「よさ」を生かす～子どもに表現意欲と自信をもたせるには～ 講師：小学校教育研究会図画工作科　元会長　上村　綾子氏
7	19	救命救急法講習会 講師 八戸消防署 根城分遣所 職員
8	30	県学習状況調査の採点・分析・考察
9	20	特別な配慮を必要とする児童生徒への支援 講師：青森県総合学校教育センター　指導主事　藤川　くみ氏
10	18	一人一台端末活用研修～こども Suite シリーズ～ 講師：(株) ゼッタリンクス　高橋　裕生氏（オンライン研修）
2	21	CRT 分析・考察

６　研究の成果

自分の考えをもたせる手立てを講じたことで、課題を自分事と捉えて学習に向かうようになった。さらに、目的を明確にした対話的活動場面を設定し、自信をもたせる声がけや雰囲気づくり、問い返し等を工夫したことで、自分の考えを相手に伝えようとしたり、友達の話をよく聞こうとしたりするなど、主体的に課題解決に取り組む姿が見られた。

７　研究の課題

児童全員が授業に参加できるようにすること、また、児童のつぶやき、考えをつないで、全体に広げたり深めたりするためには、教師のファシリテーション力をもっと高めていく必要がある。また、特別支援の視点を取り入れ、個に応じた配慮を講じていくことも大切である。

（記入者　小向　佳奈子）